

## 研究経過報告

村上 隆

1984年8月から1985年7月までの経過について述べたい。諸般の事情により、極めて多忙であったとはいえ、今ふり返ってみると、はなはだ非生産的な1年であったと言わざるを得ない。コマギレの時間をどのようにやり繰りするかが、最大の課題ということなのだが…。

1. 3相データの因子分析 昨年述べた多ブロック因子分析（これはもはや3相データの枠をはみ出しているのだが）については、本紀要に一応発表することができた。これと、3相データの解析法とを統合した形のプログラムも最近一応の完成をみた。これについては、若林研究室で行われた“組織パーソナリティーに関する調査”のデータに適用し、ある程度の成果が得られており、近々それについては刊行・公表されるであろう。またこの間、幾人かの研究者による準3相因子分析の適用例が発表されたことはうれしく思っている。またSD法タイプのデータについては、大学院の廣岡秀一氏とともに、今年の日本文学計量学会大会において、若干の適用例を発表した。現在は、近年開発された一種のシミュレーションにもとづく推測統計の手法である bootstrap 法を用いて、推定されたパラメータの標準誤差を求める試みを行いつつある。これまで、3相因子分析に関連した手法は全く探索的レベルのもののみならず、標本論的議論は一切してこなかったが、強力な tool が得られたことで、今後この方向でも検討が可能になると思われる。

2. 外国人の日本語能力試験 昨年に引き続き、日本語教育学会による日本語能力認定試行試験に協力し、言語センター大坪一夫助教授（現筑波大学教授）とともに“外国人のための日本語能力認定試験に関する調査研究の経過報告V”を執筆した。この試行試験はこれで終了し、新たに昨年度から国家の水準で大規模に実施されることとなった“日本語能力試験”に調査員として参加、分析を担当している。そしてちょっとここに書き注すわけにはいかない、実にさまざまな（その一部はほとんど奇怪と言ってよいような）体験を今日まで続けている。

（試験そのものはきちんと作成、実施されており、特に大きな問題点があるわけではない。念のため。）今のところは、ほとんど偶然のいきがかりとは言え、このような巨大プロジェクトに参加することができたことに感謝し、引き続き努力したいという決意を表明しておこう。

その他、若干の共同研究に参加しているが、これらについては次年度以降に述べることにしたい。また、“研究”の名に値するかどうかは疑問であるが、“海保博之（編）心理・教育データの解析法10講 基礎編 福村出版”、“応用編”のあわせて3講（回帰・相関、因子分析、多変量分散分析）を執筆した。心理学における、データ解析について、筆者なりの見解をある程度盛り込みえたつもりである。もしお目にとまったら、ご批判を賜りたい。

## 研究経過報告——昭和59年度

田 畑 治

1. カウンセリング過程の研究。この領域では、夢分析に関する論文を発表することができた。2事例とも母性喪失体験をもち、カウンセラー（治療者）とはほぼ同一年齢の男性ならびに女性のクライエントであった。（「心理治療過程に現れた治療者像とその機能（Ⅱ）」、名古屋大学教育学部紀要——教育心理学科——、第31巻、1—23頁、昭和59年12月）。

また依頼されてではあるが、カウンセリング・心理療法の方法論や展望に関して、つぎのような著書や論文をまとめることができた。一つは『カウンセリング』（講

座・サイコセラピー 1. 内山喜久雄・高野清純と共著、日本文化科学社、昭和59年11月、9—28、45—132、205—216、217—270の各頁）であり、文献展望をもとにまとめた概論書である。もう一つは、京都大学教育学部梅本堯夫教授の停年退官を記念しての出版に、「来談者中心療法—その現状と自己課題」（梅本堯夫編『教育心理学の展開』、新曜社、昭和60年4月、305—313頁）を分担した。これは筆者のカウンセリング・心理療法、特に来談者中心療法の理論的実践的研究の開始から今日に至るまでの自己展望を全体に3期に区分しての考察や、

筆者が来談者中心療法から学んできていることをまとめた。本書は、大学院生のためのガイドブック的な書物として有効であろう。3つめは、“治療の中での父性機能”に関して、カウンセリングの立場での意味についてまとめた。筆者のカウンセリング実践における“母性機能”と“父性機能”の両機能の内容を明確にする絶好の機会となった（「治療の中での父性機能・カウンセリング」、『季刊精神療法』第10巻2号、130—133頁、昭和59年4月）。4つめは、今日、医療のみならず歯科診療においても、カウンセリングが重視されてきている。“痛む歯”の治療だけでなく、“痛む歯をもち、苦しむ人間”への援助機能を、歯科診療の施術者（歯科医、歯科衛生士）、が身につける態度条件をいくつかの点について論じた（「歯科診療におけるカウンセリング」（『デンタルハイジーン』（医歯薬出版K.K.）、第5巻第1号、30—36頁、昭和60年1月）。

## 2. 心理臨床家の養成、教育・訓練の問題

この領域では、山崎武彦氏（福島市・一陽会病院検査部長）の「理想を求めすぎるある大卒男子事例について—ある神経質症者が自己同一化を獲得するまで—」（日心臨第3回大会、広島大学、昭和59年11月）のコメントとなる機会を得た。氏の60数回、3年近くにわたる心理面接（カウンセリング）の援助目標、治療のターゲット、治療者の役割、心理検査を導入したことの意味、家族との分離・独立の問題、クライアントが真に求めていたこと等について、筆者の臨床経験をもとにしてコメントをした。

米国から来日され、本学部で特定研究（「教育改革研究」）の講演をされた Walter Feinberg 教授（イリノイ大学）に同伴した夫人 Dr. Eleanor Feinberg（イリノイ州立精神衛生センター、“認定サイコロジスト”）を囲んで、昭和59年12月に、臨床棟スタッフ有志と「名古屋カウンセリング・セミナー '84」をもつことができた。筆者は、“家庭内暴力の息子をもつ母親のカウンセリング—“おしん”のケース—（英文）」を発表し、コメントを得た。米国での家庭内暴力との差異を討議し、日本での母親—息子関係の結びつきの特異性を

指摘された。（また筆者の勧めで、大学院（心理臨床コース）学生諸君が手分けして英文に翻訳し、「Minimum Standard of Education and Training for Clinical Psychologist (Proposal)」（1984）を発表した。日本の教育・訓練プログラムで実習体験コースが重視されていることが評価されたことを付記しておく。）

## 3. 臨床青年心理学への接近。

今年度は、世に問うことはできなく、開店休業であった。

4. グループ・アプローチ、エンカウンター・グループ、学生相談に関する実践研究。昭和60年新春早々の第18回全国学生相談研究会議・学生相談三河シンポジウムで「心因反応をおこした学生の退院後の適応の援助」と題して、シンポジウムの話題提供者となった。この事例は、定期面接前段階と定期面接に分けて発表し、古い事例であるが、筆者の10数年前の取り組みを「逐語記録」をもとにして現在の時点でふり返えることができた（第18回全国学生相談研究会議・学生相談三河シンポジウム報告書、愛知教育大学、昭和60年3月、75—80頁）。

すっかり恒例になった本学学生相談室主催の第8回自己発見のための合宿セミナーが、今年は8月末に中津川研修センターで開かれ、今回も“グループ”のファシリテーターとして参加した。今年度は専任室員土川隆史先生が九州大学へ内地留学中のことでもあり、残った者で何とかファシリテーターを務め、一応終了することができた。何回やっても、学生メンバーがその年毎に入れ替り、またファシリテーター陣の連携の問題もあり、“学生グループ”の難しさをしみじみ反省させられている。とにかく10回までは連続して積み重ねていきたいと念じている（『昭和59年度厚生補導特別企画・第8回自己発見のための合宿セミナー』、名古屋大学学生相談室、昭和60年3月、1—21、24—26、44—48頁）。

## 5. 教育臨床、教育的人間関係に関するもの。

「教育における共感と離反」（『現代のコミュニケーション—情報・適応・社会』名古屋大学公開講座2、名古屋大学出版会、昭和59年9月、37—54頁）。

# 研 究 経 過 報 告

若 林 満

## 1 研究活動と学会報告

本年度は昨年までの研究データの整理と報告の時期と考

えていたが、進行がおそく現在まだその作業が継続中である。まず、①組織パーソナリティに関する研究である